

# 誰が言う？ 「走れメロス」

早稲田大学教授

森山卓郎 もりやま たくろう

「走れメロス」というこのタイトルは、もちろん太宰治自身によるものである。実は、教科書本文にはないが、この作品の原典では、末尾に「古伝説と、シルレルの詩から。」という注釈がある。では、その太宰が見たとされる詩のタイトルは何かといえば、それは「人質」(『新編シラー詩抄』(小栗孝則訳、改造文庫)。「人質」だと、事情をあっさりとは抽象的にまとめるような印象のタイトルになる。

さて、一般に小説のタイトルに命令形を使う例はあまりない。「走れメロス」というタイトルはその点で面白い。「走るメロス」「メロスは走る」だと単なる説明になってしまう。仮にも「友情」「信頼」などととなると道徳教材みたいになる。

では、このタイトル、誰の言葉なのだろう。これには少なくとも二通りの解釈がある。一つは、一般的な命令文

で、作者が読者とともに「走れメロス」と言うというものだ。もう一つは、本文での「走れ！メロス」という表現がタイトルになったという解釈だ。「略」私は信頼に報いなければならぬ。今はただその一事だ。走れ！メロス。」という、メロスが疲労から回復する場面だ。この部分を素直に読めば、「走れメロス」はメロス自身が自分に対して言っている。

この場面は重要だ。疲れ果てて、「正義だの、信実だの、愛だの、考えてみればくだらない。人を殺して自分が生きる。それが人間世界の定法ではなかったか。」などとも考えるメロス。居直って、まどろんでさえている。妹の婿に「メロスの弟になったことを誇ってくれ」などと意味深なことを言っていたのとはまるで別人だ。この弱さ、いい加減さ。

しかし、「僅かながら希望が生まれ

た」後、今度は「私は信じられている」と思い直す。一度は本気でやめようと思ったのだが、また走り続けようとするのだ。「弱い、いい加減なメロス」が「信頼に答えようとするメロス」へと立ち戻って、自らを奮い立たせる大切な言葉が「走れメロス」だ。

応援のように言う一般的な言葉としてこのタイトルを考えるのもよい。走る場面全体を通してのタイトルとなる。しかし、「悪い夢」を見たこの場面をふまえて、メロス自身の言葉と考えるのもまた面白い。直前の、弱さ、いい加減さと、そこからの立ち直りを背景にした「走れメロス」だ。

もっとも彼は自分で思い直したのではない。水を飲んだことがきっかけだ。水があつてよかった。いやあ、彼にはいろいろ言いたくなる。「水飲めメロス」「考えて行動しろメロス」。でもやはり一番は「走れメロス」かな。